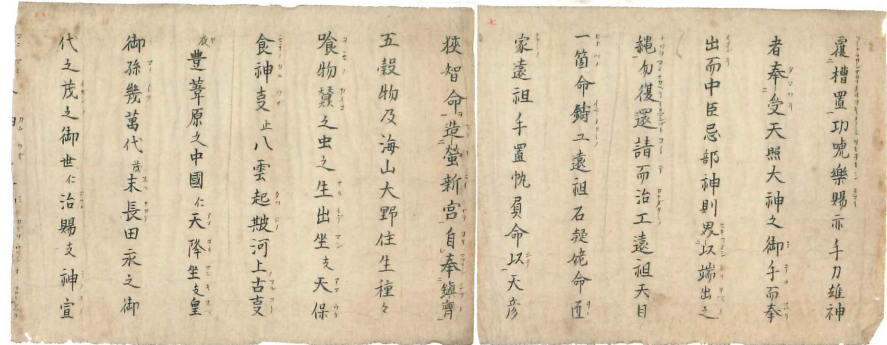


〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ 29 「齋藤義彦自筆『太々御神楽祝詞』」

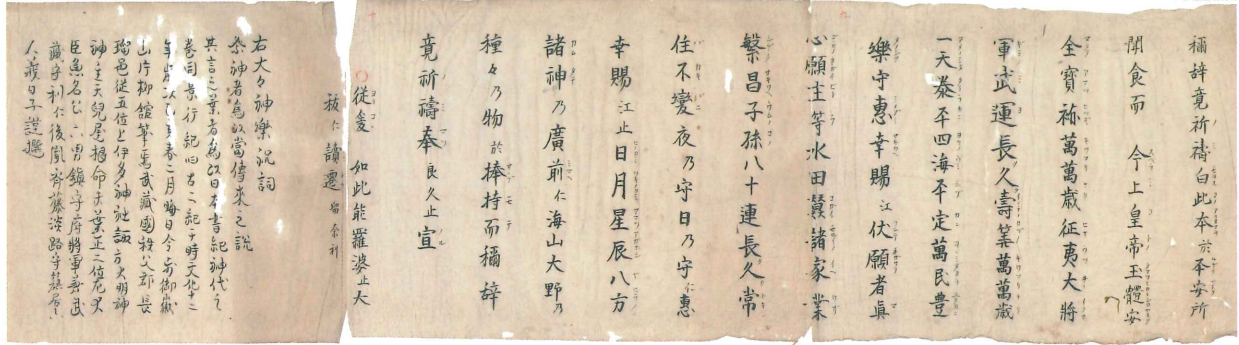
日本風俗史学会 会員 齋藤 慎

元青梅市文化財保護審議会会長

宝物殿で発見された「太々御神楽祝詞」(全十一枚のうち後半四枚と奥書まで)



一枚分の半紙のサイズ 横 38.8cm×縦 27.5cm



「股引草鞋玉小菅、すげの小笠の波たちて旅の装束も、み吉野の御嶽のみちの行程は、娘盛りの十六里」

これは、天保五年(一八二五)刊行の武蔵国御嶽山への道中案内「御嶽菅笠」の書き出しです。日本橋から御嶽山への街道の風物に、旅館・休み所まで織り込んだ美しい七五調の古典的な「道行」のかるやかな文体です。その作者は、埼玉県秩父郡小鹿野町(当時の長留村)の神職だった神道学者齋藤義彦(天明四年・一七八四―天保十二年一八四一)で、和歌にも優れた人です。

こんな文才や発想で、人々に古典に基づく神道を広めようとしたのが齋藤義彦で、「御嶽菅笠」の名文は晩年五〇歳の頃の作品でした。それ以前義彦は、すでに三〇歳頃までに御嶽山には千度も登り、御師家の青少年たちと交流し、講の信者と山の御師たちの共同祭祀である御嶽山の太々神楽舞十八座を研究した「御嶽山 大麻止乃豆乃天神社 太々御神楽考」三巻三冊を著しています。

あとがきで御嶽の御師の片柳栄重という人が、三十一歳の義彦を「我が師人(ものおしへびと)」と評価しています。その後日本古来の神道へ、実践的にわかりやすく導く小形折本子「神拜小言集」の天保三年

(一八三三)刊行に、「御嶽菅笠」の魅力的な文章に、義彦は古典による学識・感性を発揮したのです。さらに身近に参拝できる郷土の「延喜式」の神社の所在地や祭神を確定し、その道法をつけた案内書も刊行したようで、江戸住みだった青梅の文人の山田早苗は、「玉川派源日記」の中にその一部を写し取り、また「御嶽菅笠」を入手したと記しています。

そんな齋藤義彦が壮年三〇歳代のはじめに執筆した「太々神楽」奏上の神事に読み上げる「祝詞」の自筆草稿が武蔵御嶽神社宝物殿で発見されました。年代のはっきりした義彦自筆としては現在のところ、青梅で最古のものと思います。包紙まで残っていて「文化十二年(一八一五) 大麻止乃豆乃天神社、太々御神楽祝詞」とあります。「大麻止乃豆乃天神」とは、平安時代の法制の古典「延喜式」神名帳にある多磨郡八座の中の神で、それを義彦は「御嶽神社」の古名と考えていたのです。

祝詞の本文は、上質の美濃半紙を横につなぎ一紙(一枚)に七行あつて、本来奥書共十二枚でしたが、冒頭の一紙は欠失しています。本紙の向かつて左上端に「から十一まで順序を示す墨書は、一紙目が欠失してつなぎ目のはがれた残りの十一枚の散逸を恐れ、保存のために記入されたのでしよう。かなりの頻度で使用されたようで、上下のへりがすり減っています。

全体の構成は、まず、御嶽の山上に鎮座する大麻止乃豆乃天神で神事を行うことをのべ、次に御祭神である大己貴命と少彦命

い王権神授を説く「大祓」を義彦は是非聞かせたかったはず。そして奥書になります。奥書をつけるなんて、祝詞にはめずらしい。義彦の意気込みを感じます。書き下しにしておきます。「右太々神楽の祝詞。祭神は当(御嶽社)伝来の説にして、其言の葉は「日本書紀」の神代之巻・同景行紀「旧二紀(旧事紀か)。時に文化十二年歲次己亥春一月晦日。御嶽山の片柳の館に筆を歩ましむ。武蔵国秩父郡長留の邑。從五位上伊多神社諏訪大明神主にして、天兒屋根命の末葉正二位左大臣魚名公六男鎮守府將軍兼武蔵守利仁の後胤、齋藤淡路守旗井真人義日子(彦)謹みて撰ぶ。」

祭神は当社の伝来の説で、神話の部分には「日本書紀」の神代の巻と景行天皇の巻、「旧事(本)紀」によったとしています。御嶽山片柳の館云々とは、現片柳三郎家の片柳勘解由家執筆したこと。同家には義彦関係の資料が多く、天保初年代に義彦が「公儀(幕府)神道方」の吉川家の学士、代官、さらに学頭に任じられたことも迎れます。天兒屋根命から利仁の後胤までは、自分の家系が藤原氏であるということ。淡路守は二十四歳の文化五年(一八〇八)、朝廷から「むさし国秩父郡長留村すは大明神主藤居義日子」の名義で淡路守に任官した口宣案を左中弁和定により受領した正式の官名です。藤居は、長留村の小名を姓として名乗り、真人は、八色の姓の一ですが、古代の氏の称号で、こんな時代遅れの名乗り方をすると、義彦

命及び日本武尊の「神祕三座」三柱の神の国士経営と神威、次に「広(廣) 国押武金日天皇(二七代 安閑天皇)と大伴金村大連(安閑天皇など三代に仕えた大伴の武将)の神々としています。従来の威王大権現の神格を新しく古典的な神道風に言い換えたのです。古代へのあこがれでしょうか。次に「日本書紀」による天岩屋戸の祭祀の様子、諸職の祖神による神殿造作、皇孫統治による豊穡と安泰を述べます。天岩屋戸の祭祀と、天鈿女の神楽は太々神楽祝詞や神事の方を意識したものです。また天照大神の神殿造作の話、諸職の祖神、皇孫(天皇の祖)の統治の記述は、義彦の国家観と関わるものでしょう。

その辺りの原文を読み下してみます。「今上帝、玉体安宝、宝祚、万万歳(スベラミコトノ、タマツミカタシロ、ヤスクマタク、アマツヒツギ、キワマリナク、「征夷大將軍、武運長久、壽算、万万歳(ヒナウツオオイクサギミ、ミヨナガクヒサシク、イノチノカズノ、キワマリナク)」「一 天泰平、四海平定、万民豊樂、守惠幸賜(アメノシタタイラカニ、ヨツノウミシツカニ、ヨラミタカラユタカナタノシク、マモリミメグミ、サキワヘタマエ)」「真心願主等、水田、蚕蟲、諸家繁昌(マゴコロノネガイヒトラ、ミツタ、コガイ、モロモロノイエワザ、シゲクサキワヘ)。

天皇の健康・長寿と皇位の永久、征夷大將軍(徳川將軍)の武運長久、寿命長久、そして太々神楽の祈願の人々の、稲作・蚕・家職の繁昌を祈っています。当時の日本は、の古代への憧憬を感じます。

この祝詞執筆以前に、同じ片柳勘解由家で義彦は、前掲の「太々御神楽考」で、御嶽の大々神楽の十八座を同じく、「古事記」「日本書紀」「旧事(本)紀」「延喜式」「万葉集」など多くの古典を参考にテーマ・登場人物・扮装まで研究していました。さらに汎例には「師説に愚案を加ふ」とあります。義彦は若年の折に、神楽舞を伝習していた秩父神社の神主園田筑前に神道学んだと伝えるので、師説とは秩父神社の園田神主の教えの可能性がります。ちなみに神楽は、すでに廃絶したそうです。

大正十三年(一九二四)三月、神仏分離の跡を探索した鷲尾順敬は、当時御嶽山上の人々が義彦を師として「国典(古典)」を学んでいたの、いよいよ義彦の言っていたような世の中になったと思ひ、明治維新の神仏分離に対処したという故老の言を記録します。「明治維新 神仏分離史料」所収御嶽のために道中案内の美文を綴った義彦は、近代の変革を迎えるにあつても、御嶽の山に大きな足跡を残していたのです。御嶽にとつても義彦にも貴重なこの資料は、最近宝物殿で発見されました。早忽の執筆にあたり現地探訪や文献収集など、御嶽神社の須崎直洋禰宜、天野宣子権禰宜、並びに青梅町方古文書会の小島みどり氏より、貴重なご協力を頂きました。併せて先学の義彦研究の業績として、河野省三「神道史の研究」また、塩野啓山の「埼玉史談」所収の論考からの学恩を銘記致します。